



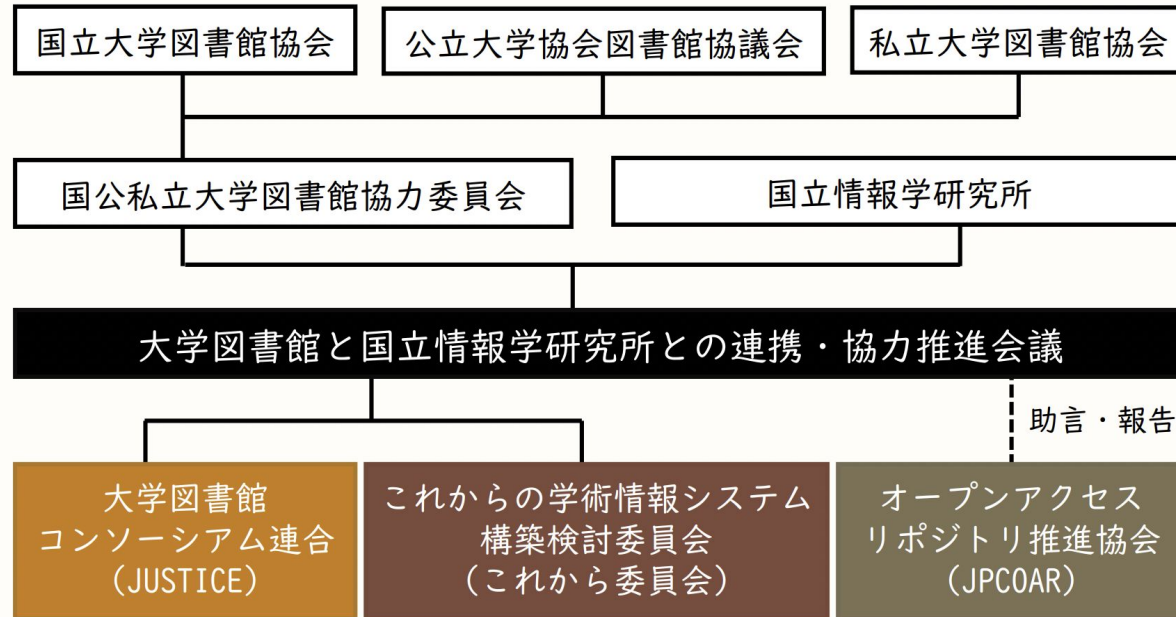
「これからの学術情報システム構築検討委員会」 が実現を目指すこと

大向 一輝

東京大学大学院人文社会系研究科
これからの学術情報システム構築検討委員会



検討体制の概要



これから委員会



- 「国立情報学研究所と国公立大学図書館協力委員会との間における連携・協力の推進に関する協定書」より
 - バックファイルを含む電子ジャーナル等の確保と恒久的なアクセス保証体制の整備
 - 機関リポジトリを通じた大学の知の発信システムの構築
 - 電子情報資源を含む総合目録データベースの強化
 - 学術情報の確保と発信に関する人材の交流と育成
 - 学術情報の確保と発信に関する国際連携の推進

これから委員会における検討の経緯

	委員会	電子リソース	目録システム
2012	委員会設置	ERDBプロトタイプ構築プロジェクト (-2013)	
2014		電子リソースデータ共有WG	
2015	<u>「これからの学術情報システムの在り方について」</u>	電子リソースデータ共有作業部会 設置 ERDB-JP公開	NACSIS-CAT検討作業部会 設置 「NACSIS-CAT/ILLの軽量化・合理化について（基本方針案の要点）」
2016		「電子リソース管理システムの利用可能性の検証について（平成28年度最終報告）」	「基本方針」 「実施方針」
2017	これからの学術情報システムに関する意見交換会2017	「電子リソース管理システムの利用可能性の検証について（2017年度最終報告）」	
2018	<u>「これからの学術情報システムの在り方について（2019）」</u>	「電子リソース業務の管理基盤・ワークフロー構築についての検討（2018年度報告）」他	「NACSIS-CAT/ILLの軽量化・合理化について（最終まとめ）」 (→CAT2020)
2019	作業部会の再編	- システムモデル検討作業部会 - システムワークフロー検討作業部会	
2020			CAT2020開始（8/3）
2021		「大学図書館向け学術情報システムを36年ぶりに一新」	

平成 27 年 5 月 29 日
これからの学術情報システム構築検討委員会

これからの学術情報システムの在り方について

「大学図書館と国立情報学研究所との連携・協力推進会議」の下に設置された本委員会では、標記に係る状況を以下のように捉え、特にNACSIS-CAT/ILLの軽量化・合理化を最重要課題として、国公私立大学図書館等が国立情報学研究所と連携して解決していくための方策を検討している。

1. 取り巻く環境の変化

学術審議会答申「今後における学術情報システムの在り方について」(1980 年)を受け、1985 年に総合目録データベースの形成と図書館間相互利用を目的とする「目録所在情報サービス」の運用が開始されて以来、今日までに学術情報を取り巻く環境には様々な変化が起きている。特に、電子ジャーナルをはじめとした電子情報資源の普及によって、資料の流通・管理のあり方が大きく変貌したこと、また研究者、学生の情報利用や研究・教育のプロセスがますます電子的手段を前提とするものになっていることへの対応が急務となっている。

NACSIS-CAT/ILL を中核とした従来のシステムの軽量化・合理化を図りつつ、そうした変化への対応を行えるシステムの整備を目指す必要がある。

2. 進むべき方向性

これからの学術情報システムに求められるのは、ユーザーが必要とする学術情報を直接的かつ迅速に入手することができる環境であり、これらを実現するために、以下の3点を推進する必要がある。

(1) 統合的発見環境の提供

電子情報資源・印刷体を区別することなく統合的に発見し、さらに、最終的に必要とする学術情報にアクセスできる環境を構築する。

これからの学術情報システムの在り方について(2015)

2019 年 2 月 15 日

これからの学術情報システム構築検討委員会

これからの学術情報システムの在り方について (2019)

「大学図書館と国立情報学研究所との連携・協力推進会議」の下に設置された本委員会は、2015 年 5 月に「これからの学術情報システムの在り方について」(以下「在り方」)をまとめ、電子情報資源のデータ管理・共有のワークフローの検討及びNACSIS-CAT/ILLの再構築(軽量化・合理化)に取り組んできた。以下では、これまでの検討を整理し、現在の目録所在情報サービス機能を維持しつつ、電子情報資源への対応等、より豊かな機能を各機関が選択的に導入できるシステムの実現に向け、2022 年を目処とした進むべき方向性、次に取り組むべき課題、及び検討体制を提示する。

なお、本文書内で使用する用語については、文書末尾の「用語集」を参照のこと。

1. 取り巻く環境の変化

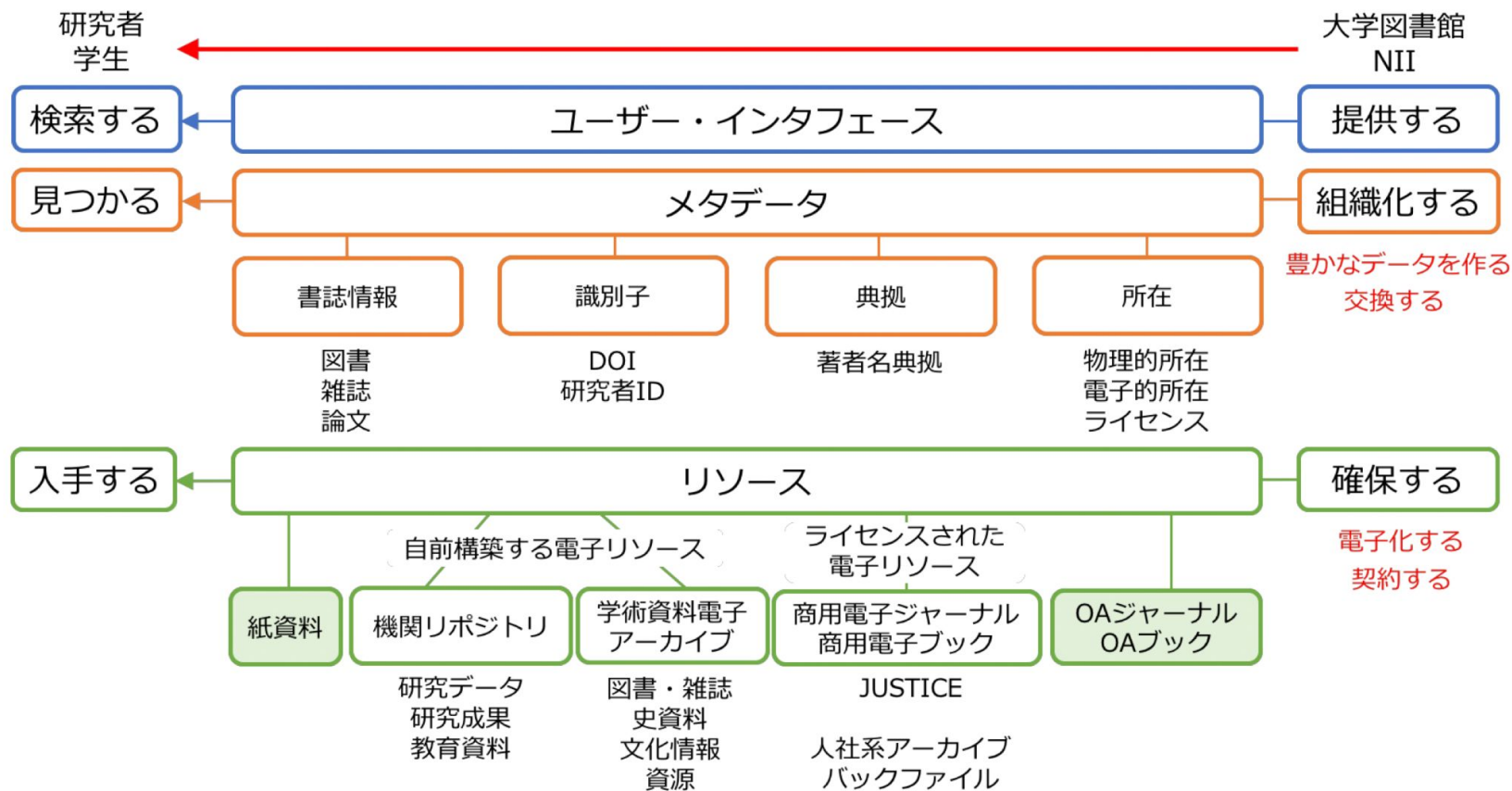
学術審議会答申「今後における学術情報システムの在り方について」(1980 年)を受け、1985 年に総合目録データベースの形成と図書館間相互利用を目的とする「目録所在情報サービス (NACSIS-CAT/ILL)」の運用が開始されて以来、今日までに学術情報を取り巻く環境には様々な変化が起きている。特に、電子ジャーナルをはじめとした電子情報資源の普及によって、資料の流通・管理のあり方が大きく変貌したこと、また研究者、学生の情報利用や研究・教育のプロセスがますます電子的手段を前提とするもの

これからの学術情報システムの在り方について(2019)

これからの学術情報システムの在り方について



- 2015
 - 統合的発見環境の提供
 - メタデータの標準化
 - 学術情報資源の確保
- 2019
 - 統合的発見環境を可能にする新たな図書館システム・ネットワークの構築
 - 持続可能な運用体制の構築
 - システムの共同調達・運用への挑戦
 - メタデータの高度化
 - 学術情報資源の確保



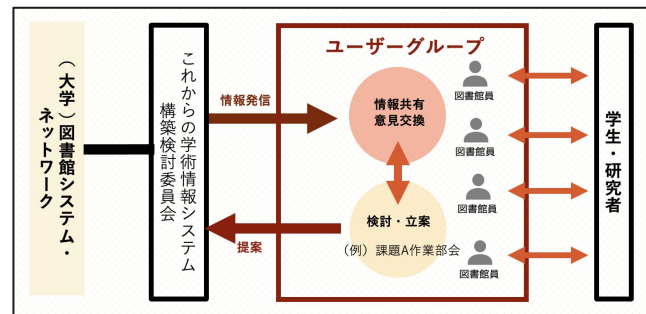
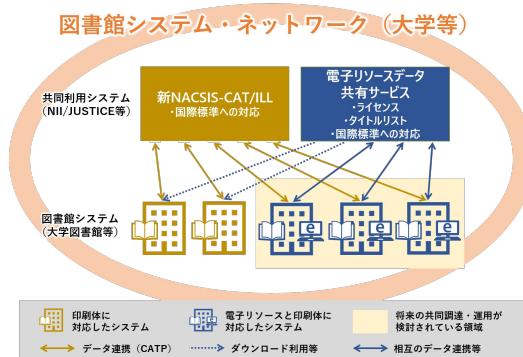
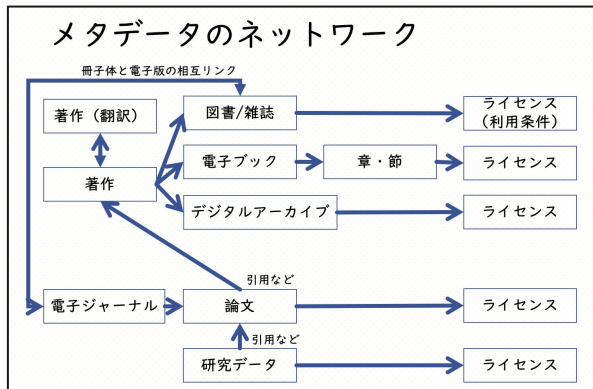
「これから委員会が実現を目指すこと」



- 「在り方(2019)」の次の展開
 - 現状の把握
 - 学術コミュニケーションの一員として
 - 大学・研究機関として
 - アクションプランの提示
 - 3つのネットワーク
 - DXへの貢献
- 2023年度はじめに公開予定

3つのネットワーク

- 固有性を保ちつつ、外部に開かれたつながりをつくる
 - データ:これからの学術情報システムのメタデータ収集・作成方針について(2022)
 - システム:図書館システム・ネットワーク
 - 人:ユーザーグループ



これから委員会のこれから



- ステークホルダーの多様化とその変化を把握する
 - 研究者・教育者
 - 学生
 - 出版社
 - 経営層
 - ベンダー
 - サービスプロバイダー
- 役割分担とコラボレーションによる課題解決を図る
 - JUSTICE・JPCOAR...
 - 国立国会図書館・科学技術振興機構...
 - 国際連携
- 他のステークホルダーからの「見える化」

今後における学術情報システムの在り方について

(答 申)
学 術 審 議 会
昭 和 55 年 1 月

去る1月29日開催された第40回学術審議会総会において、「今後における学術情報システムの在り方について」の答申が文部大臣に提出された。この問題については、昨年6月に中間報告が公表され(本誌15号所載)、これに対し広く国公立大学等から意見が寄せられた。これらの意見にもとづき、学術情報資料分科学術情報部会においてさらに慎重に審議し、最終答申文がとりまとめられた。

中間報告に対して、文書で意見を提出した機関その他は全部で120に及ぶが、その中で国公立大学の図書館からは82件の意見が寄せられた。このことから、この問題に対する大学図書館の関心の深さが推測される。このシステム構想が大学図書館改善を第一のねらいとして出発したことも十分呼応している。

これらの意見全体を見渡して言えることは、「学術情報システム」構想に対する反対意見は皆無であったことである。さらに、多くの意見はこの構想を積極的に評価し、早期実現を期待するものであった。賛成の中にも当然いろいろの付帯意見が述べられている。これらはまことに多岐にわたるものであり、詳細に述べることは紙面の関係上困難であるが、その主要なものを大雑把に集約すると次のようになる。

- 人文・社会科学系分野に対する配慮が十分でない。
- 公私立大学との関係を明確にしてほしい。
- 一次情報収集整備に関し、拠点図書館方式を他の分野にも拡大すべきである。
- 大学図書館の強化策を期待する。
- 図書館機能を十分に発揮するため、学内の図書館組織の一元的体系化が必要である。
- MARC(所在情報を含む)利用システムの促進、適切的入力进行を期待する。
- 「センター機能」は既存のいずれの機関の機能とも異なるので、そのためのセンター機関の設置を期待する。
- 現職者教育のための研修会、講習会等の拡大を期待する。

今後における学術情報システムの在り方について(1980)